

飯田高校同窓会の職員名簿に「宇波耕策」という名前がある。大正8年4月から大正11年5月にかけて在職した国漢の教師である。

この名前は、大正9年6月22・24日の地元紙「南信」

にもあり、「若き日のほこり」と題する戯曲？を發表しているほか、10年2月9日付には「大阪市青年団歌に一等当選」の記事が確認できる。また、当時の「飯田小学校」の「青垣なして 続く山」や、「音もさやけき阿知川の」の下條中学校の校歌の作詞をしている。

静岡県藤枝に帰郷後は昭和11年から15年まで藤枝東高校の前身の志太中学校の校長兼同窓会長を務めている。この時期には国学者賀

茂真淵研究の小論がある。

しかし、伊那谷にとつて興味深いのは、この名前が河上肇の地下潜伏時の偽名として使われている意味だ。

若い人は知らない人も多いだろうが、河上肇は大

宇波耕策について

正・昭和のマルクス経済の研究者で、大正デモクラシーの風潮の中、貧困というテーマに経済学的に取り組んだ『貧乏物語』がベストセラーになった。その後、京都帝大教授の職を辞し、共産主義の実践活動に入るが、治安維持法違反で逮捕・収監される。収監中に

自らの共産党活動に対する敗北声明を發し、知識人に大きな衝撃を与えた。出獄後は獄中で親しんだ漢詩『陸放翁鑑賞』や『自叙伝』などが多くの人に読まれた。この河上肇が当局の目を逃れ、実践活動に入る地下生活を手引きしたのが、帝都を震撼せしめた大森ギヤ

嶋 不濁

ング事件の首謀者とされる大塚有章で、当局にマークされ逮捕寸前の時で、河上との接触で河上の身辺に当局の手のびるのを危惧した大塚が自身の代役に立てたのが、下宿先の大家にあたる原鼎。その原鼎が案内した潜伏先がいずれも都内の「蟹江医院」、その次が

「画家の椎名剛美」であった。もちろん河上と宇波に面識はない。偽名「宇波耕策」といい、「河上肇全集」や研究論文等に指摘されてはいないが、大塚の指示というより原鼎の飯田の人脈を感じさせる。

原鼎は飯田病院創設者原



大塚有章『未完の旅路』全6巻

上肇は原鼎が気に入りに、出獄後には原鼎を頼って飯田への移住を計画した（信州移住の夢）こともあった。二人の交友は戦後河上が亡くなるまで続いた。四校で原と同級であった中野重治は「先生一家と原家のあいだには美しい人間的交通が始まり、それは最後まで変わるところありませんでした」（「原鼎と河上さん」と書いた。また『河上肇全集』の書簡集の大半が原鼎とのやり取りであるのは瞠目に値する。

「捨てないで！」の活動で拾われた大塚有章『未完の旅路』、松本清張「スパイMの謀略」（『昭和史発掘』5巻）と前掲の河上肇や中野重治の著作群、昭和初期の左翼運動と伊那谷をつなぐ鍵言葉が「宇波耕策」という名前なのである。